

今日の説教のポイント <マタイによる福音書5章33~37節>

①「しかし、わたしは言っておく。一切誓いを立ててはならない。」(34)

イエス様が、「誓ってはならない」と、強い調子で教えておられます。しかし、その意味をこの箇所だけから考えるのではなく、すぐ前(27~32節)で、結婚した男女の間の誠実さ(姦淫してはならない)について教えられたことを考える必要があります。「誓う」ことの代表的な一つに結婚式での誓いがあります。誓い合ったのに相手を裏切る時(姦淫、今で言う不倫をなす時)、そこには嘘が生じて来ます。嘘は、まさに嘘をつく場合もありますし、言うべきことを言わなかったり、あるいは、言い訳をして誤魔化す場合もあります。先週お話ししましたように、夫婦の間でそのようなことが起こる時には、もはや信頼し合える関係は破綻していますし、神様は御自身と私たちの間でも、そのような事態を男女の姦淫に例えて非難されているのです。「誓ってはならない」とは、「嘘をついてはならない」問題であるのです。さて、しかし、それではなぜイエス様は、「誓ったことは守れ」ではなく、「一切、誓いを立ててはならない」と言われたのでしょうか。「あなたたちは誓っても守れないから、誓うな」と言われたのでしょうか？

②「あなたがたは、『然り、然り』『否、否』と言いなさい。それ以上のことは、悪い者から出るのである。」(37)

『然り、然り』『否、否』と言うとはどういうことでしょうか。これは、「私たちは罪人で、確かなことは何も言えないから、余計なことを言うな」という意味ではありません。むしろ、「あなたの『然り』を本当の『然り』とさせなさい。あなたの『否』を本当の『否』とさせなさい」、すなわち、「嘘を言ってはならない。誓ったことを果たしなさい」という方向で、イエス様はむしろ強めて語っておられるのです。誓っても守れないという人間の弱さを考える方向に持って行って考えやすい箇所ですが、それは違います。誓い合って結婚した二人は、「然りは然り」「否は否」と、そこに嘘は入っていない会話を、ただあるがままに自然に語るができるようになるのです。それができない時、「悪い者から出ている」、すなわち、自分の中に非がある、つまり、罪に支配されていることを考えなければなりませんし、考える時に、また嘘をつかない姿に戻っていけるのです。なぜ戻れるのか？そこでイエス・キリストの十字架の死が大きな意味を持って来るのです。私たちはもはや、自分の頭にかけて誓いません(36節)。神様の御子の十字架の死でしか赦され得ない自分の罪深さ、愚かさ、いいかげんさを知らされたからです。しかし、それと同時に、その私を赦し、生かして下さる神様の恵みを知ったからです！その神様の愛に感謝し、その神様の力を信じて生きていくときに、私たちの中から「悪い者が出て行く」、すなわち、神の力が勝利することが約束されているからです！